

Title	前號「下河邊長流と懐徳堂」の追記
Author(s)	羽倉, 敬尚
Citation	懐徳. 1974, 44, p. 11-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90516
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## 前號「下河邊長流と懷德堂」の追記

## 羽 倉 敬

尙

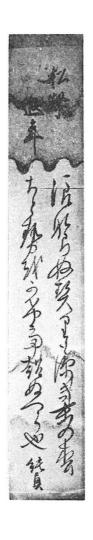
ヲ契ル 松ガ遐年

が永年青々と變

らぬこと

は青森縣の海岸の松林

波こさじとは」の歌意をとつたもの、「末の松山」がたみに(お互いに)袖を、しぼりつつ、末の松山、かたみに(お互いに)袖を、しぼりつつ、末の松山、かたみに(お互いに)袖を、しぼりつつ、末の松山、かたらぬ 契りも深き 末の松



け、學堂書院の初期、 いては、西村天囚子の名著、懷徳堂考(以下、「考」と略す)の記述の一部を引用したに止めたが、蘭洲は父祖の學を受 べ、その中には長流の門人、 五井持軒(贈從五位)を叙べ、その子、繭洲(元祿十二十九七十寶曆十二二十七六二)) につ 本誌前號の、大阪の草わけ國學者、下河邊長流、殊にその、大正末年、同學故人の盡力でなされた建墓の經過を述 基礎未だ成らなかった時代、約二十年間循々教えて倦まずと云った風で、その質實業績は甚大

## で、考によ

ては、決して石庵シュウ庵の下に、在らざるのみならず、大阪文學の根柢を養いし上につきては、その功績殆んど だ一度も名を表面に表はさざりしを以てなり。然れども蘭洲は、學主、預り人にこそ爲らざれ、書院の敎育に關し 師、石庵沒後の學主)に置きて、繭洲の功を知る者稀なり。これ繭洲の書院に於ける、常に助教の地位に甘んじて、未 當時の懷德堂を說く者、重きを石庵(三宅、創學最初約五年間の學主)發庵(中井、書院創立の事務的功者で、學校預り人、

あったのである。

と述べておる。かくてこの繭洲の學を受けたのは、實にしゅう庵の二駿兒、卽ち後の大儒、

中井竹山・履軒の兄弟で

二人の上にあり

載せておく、 いては、 古今集通廿卷、 蘭洲の學は、 和歌の作品、 勢語通四卷、源語と、源語提要、和歌新題百首の如き和學書が見られる。私の前稿には、 父祖を受け和漢兼該で、しかも何れにも深く詳らかで、 その著錄を見るも、 短冊等をあげ乍ら、この蘭洲をあげずに終ったが、偶然、 蘭洲の短冊を入手したから、ここに 漢書の外、 他の者につ 萬葉集計、

從四位、 終りに、 創學初期の功者としては、石庵、 明治・大正時代、書院再興等の機會に、書院の文功者に贈位の榮典を受けたが、竹山は正四位、 しゅう庵、及び蘭洲と、掉尾の並河華翁(初號寒泉)の四儒が各々正五位を 弟履軒は

贈られた、蓋し至當の旌表であろう。

筆の篆書である、不幸、碑面躋滅したが、幸い文は速訪碑錄におさめられて傳っておる。 蘭洲の墓は、 門人の住友分家、入江育齊によって、 東寺町實相寺、 住友墓域にあり、文は中井竹山、 題は弟、 履軒